

月刊

いじろのとも

第八卷

八月号

人間関係がとれない

いま

若者が

人間関係が

取れなくなっている

という

それは

他己が

なくなってきた

ということ

オウムも

十四歳児の殺人も

根はみんないっしょ

教育の成果

いま

教育の成果は

人を

エゴイストにし

ずるがしこくすること

にあるのか

大学の先生のように

人生を考え直して

みたい人は（四四）

『聖書』解説（二〇）

一六 断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすので、まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。

一七 しかし、あなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。

一八 それは、断食していることが、人には見られないうで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます。

この部分もそうですが、キリストは一貫して、私の言います「自己」を捨てて、「他己」の根源をなす神へ帰依することを説いているのです。

この第六章で言いますと、まず出だしの一節で「人に見

せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」と述べています。

この一節をうけて、二節では次のように述べています。「だから、施しをするときには、人にほめられたくても堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。」

次いで、五節で次のように述べています。「また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくても会堂や通りの角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」

これらから分かりますように、「施し（＝お布施）」と「お祈り（＝禅定・瞑想）」と「断食（＝持戒）」という三つの重要な修行の徳目において、自己への執着を捨てて、ひたすら、ただひたすら（ここには書いていませんが、毎日まいにち）励まなければならぬと言っているのです。

三つの教えのどれにも偽善者ということばが出てきます。これらの文章からお分かりと思いますが、偽善者とは、「自己」への執らわれからする善で、他者から褒められたり、名声を得たり、欲望を満足させたり、利益を

得たりするためになす、見せ掛けの善だといえます。

善は他者のためになす行為です。人間だけが善をなすことができます。動物は、他者のために自己を自覚的に犠牲にして、世話をしたり、物を分け与えたり、助けたりすることはありません。自然の法則のままに、適者生存、自然淘汰が行われるのです。病んだり、傷ついたり、老いたり、弱ったりした個体を助けようと自覚し、意図して助けることはありません。たとえ群れていても、病になったり、傷ついたり、食べ物が食べられなかったりして、体が弱り、群れについて行けない個体は、自然淘汰を受けるだけなのです。人間の人間たるゆえんは、動物にはないこうした、心理学で「向社会行動」と呼ばれる、他者のために善をなすことができるところにあるのです。

でも、この善を、自己に執らわれて、自己の情動（性欲（子孫繁栄欲を含む）、食欲（物欲・金銭欲）、優越欲（名誉欲・勝利欲・権力欲））のためにするとき、その行為が一見、他者のための行為のように見えても、それは善とはいえないというわけです。ですから、それを偽（にせ）の善、偽善と呼ぶのです。

現代人は、全体的に自己が肥大していますから、殆どの行為が偽善になり、偽善ということばですが、死語と

なっています。私の勤める大学でも、学生と教師を含めて果たして真実の行為があるのかと、疑わせるに十分な現実があります。何が善で、何が悪なのかすらも、分からなくなっています。善だと思つてなす行為が、実は悪になっているのです。それに気付けない、あるいは気にもかけないのです。悲しいかぎりだと言わねばなりません。

ところで、前述の三つの教えである、施し（「お布施」と、お祈り（「禅定・瞑想」と、断食（「持戒」）のうち、の施しは、まさに他者に物や役務を分け与える行為ですから、善だと分かりますが、お祈りや断食は自分自身のこと、直接他者とは関わりません。ですから、善とは言えないと思われるかもしれませんが、でも、そうではないのです。

人間が、他者に対して真に善をなすためには、まず自己自身を制さなければなりません。なぜなら、いくら他者のためになることをしようと思つても、自分の損になること、たとえば名は出ないのにお金が多くいること、自分の名誉が損なわれたり、周りの人に非難されること、などになりますと多くの人は、しり込みをしまします。たとえ、それが正しいことで、かつ人を助ける行為であつてもです。

ですから、そういう行為を行うには、自分自身を制することができなければなりません。

いま多くの人は、自分自身が一番信頼のおけるものだと思っけています。他者よりも自分自身を頼りにしていません。つまり、最終的に頼りになるのは自分だと思っけているのです。ということは、自分が損をすることは、最終的にはできないということなのです。

自分への執らわれを捨て、真に他者のために善をなすためには、ここに出てきました神への祈りと、戒律を守ることがあります。祈るということは、自己をすてて他己の根源である神（最終的的他者）に自分の存在の根拠、つまり最終的に頼りになるものを求めるということなのです。そして、それと一体になるときだけ、他者の痛みが自分の痛みとして感じられるようになるのです。その時、真に善をなすことができるのです。

でも別に、そうまでして、他人のために善をなさなくても、自分は結構、幸せだと思っけている人が多いのではないのでしょうか。実は、それが自己を肥大させているということなのです。

こうした、三つの教えを守ることは、他者のために真に善をなすのに無くてはならないものなのですが、それと同時に自己の真の幸せにも欠かせないものなのです。

さて、ここでは断食を一般化して、戒律を守ることとして考えてきましたが、断食そのものについて少し考えてみたいと思います。

いま、日本は世界に類を見ないほど豊かになり、食生活もその例外ではなくなりました。昔は、お正月のお餅や、祭りのカニ・タコといった、特別に美味しいものがありました。が、いまでは飽食していて、これといった美味しいものがなくなりしました。その結果、より珍しく、美味しいものを海外にまで求める一方で、食べすぎによる成人病や太りすぎを気にして、いかにダイエットをするかが、多くの人の関心の的になっています。

日本人には断食をする慣習は一般的にはありませんが、これからは、断食をする風習を作っけてみてはどうかと思っけます。断食できなくても、一日一食にするといった、食事の制限を一週に一日ないし二日、してみてもいいでしょうか。健康によいばかりか、食べるものの美味しさが、よみがえっけてきます。また、断食を通じて戒律を守るとはどういうことなのか、体験できます。その程度のコントロールもできないようでは、人を幸せにすることも、勿論自分が幸せになることもできません。現代人は法を守ることが困難になっていますので、こうした体験がとくに大切なように思っけます。

自作随筆選

障害児学級と普通児

先日、香川県では、障害児学級へ普通児を入級させたとして、マスコミで大きく問題として取り上げられました。何度も大きな見出しの記事になりました。

問題とした論点は、「うちの子は障害児でもないのに、障害児学級へ入れて、けしからん」ということのようにです。

学校に事情を聞いたところでは、三名の障害児がいなければ、基準に満たないために、障害児学級を作ることができず、教員一名の減少になる、そうなれば、障害児をどこか普通学級に入れて指導しなければならなくなる、ということのようです。だから、普通児だけでも特別に指導した方がその子のためになるという児を親の承諾を得て、障害児学級に入れたようです。ところが、親は障害児でもないのに、障害児として扱ったとして、学校の処置に抗議しているわけです。

私は、この記事を読んで、世の中にどんなに強く障害児・者に対する差別意識が存在しているのか、暗い気持ち

ちになりました。

十年ほど前に、ある小学生から聞いた話ですが、自分の行っている学校の先生が、自分たちを叱る時、「そんなにがさがさしていたら、あの障害児学級にやるぞ」と脅かしたそうです。今回の記事を読んで、久しぶりにその話を思い出しました。

この先生のことばや今回の新聞記事が、どれほど障害児を侮辱しているか考えたことがあるのでしょうか。

新聞記事によりますと、障害児学級に在籍していても、ほとんどの教科は普通学級で受けていたようですから、ただただ、障害児学級へ入れたことが、うちの子は障害児でもないのに、という思いがして、腹に据えかねるのです。

でも、そうした思いの中には、障害児を価値の低いものとして捉える視点が存在していることは明白です。学校や新聞記者たちの中に、学力の低いことが、人間の価値の全てのように捉える視点が存在していることは、明白です。いま、学校現場には、共に学ぶべきだとして、あらゆる人を同じクラスで教育する試み（主張）がなされています。でも、それを実効あるものにするには、今の「原則一人担任制」ではだめです。もっともっと多くの、障害児教育に精通した教員が必要となります。小学

校なら、十人か二十人のクラスを、そうした教員二人以上で担任するぐらいにすべきです。

教育行政の基準を誤魔化したという点では、勿論、校長や引いては教育委員会の責任が問われなければなりません。今回の告発の目的がそうした点にあったのであればありません。教育委員会も、いな文部省もそんなことはとうに知っていたと思います。どこの教育委員会でもやっていることです。黙認しているのは、そうすることが、障害児教育を充実する道ですし、また、特別に指導を要する児童・生徒はいくらでもいるわけですから、そうした子どもを空いた定員の中に加えて、手厚く指導することは、弊害どころか、かえって望ましいことだと言えるからです。

それを、うちの子は障害児でもないのに、障害児のレッテルを貼られたという差別意識が先行してしまっています。私は、そうした差別意識を払拭（ふっしょく）しよく「ぬぐいさること」するために障害児学級や養護学級という名称はやめて、清心者学級とすべきだといっているのです。甘やかされ、自分が出来ることが増えて、ここにどんだん垢を付けていく普通児に較べ、いつまでも清いところのままである障害児のあり方をもっと高い価値として評価すべきなのです。

自作詩短歌等選

聖斗事件を捉える視点

酒鬼薔薇聖斗事件を 個人的な問題とする視点と （自己） 社会的な問題とする視点に （他己） 議論が分かれている	後者では 社会倫理の崩壊を 指摘し それを再建すべしとする でも そのための理論も 具体策もない
前者では 少年法を改正して 刑を重くすべしとする でも それで事件がなくなるとは 考えられない	それは 人間精神を 自己と他己の 弁証法的統合とする 全体的な視点が かけているから

人間への進化とは

九万年前に起こった動物から

人間への進化は

人間になって

はじめて

利他行動が

できるよう

なったということ

それは

大脳でいえば

左右半球に機能差が

生じたということ

人間精神学でいえば

自己（精）と他己（神）

が

分化し

その弁証法的統合が

営まれたとしたということ

統制と自由と愛

過去は統制（他己）

未来は自由（自己）

その統合が現在

それを可能にするもの

それが愛

我慢だけが人生

人々が

人の幸せ

願うなら

我慢だけが

人生ぞ

人文・社会科学は

学問は

過去に起こったことを

分析し

未来のための

法則を樹立する

最終的には

許されないが

自然科学では

単なる

知的好奇心から

法則を樹立する

こともある

しかし

人に関わる

人文・社会科学では

過去を知ることが

直接的に

明日の生き方に

役立つものでなければ

ならない

末法の僧侶

聖者が説いた

ただしい教えを

まちがって説く

末法の僧侶

釈尊のつとば（六〇）

法句経解説

（二〇八）よく気をつけていて、明らかな智慧あり、学ぶところ多く、忍耐がよく、戒めをまもる、そのような立派な聖者・善き人、英知ある人に親しめよ。
月がもるもるの星の進む道にしたがうように。

私は、毎年、学年始めに、自分で書いた『大学院学生心得十ヶ条』を学生に与え、その中の一つとして、「人は善い人に触れ合つてのみ善い人になる」と説いています。そして、そのためには、善い人と巡り合えるように「こころのまなこを磨く」ように、と言っています。なぜなら、たとえ善い人と物理的には出会っても、その人が善い人だと分からなければ、すれ違いに終わってしまうからです。実は、そうした人を見る目は、こころを空にし、自分への執らわれを捨てなければ得られません。それには、こころを磨かなければならないのです。理屈で「捨てればよいのだ」と分かっただけでは、だめなのです。

この偈でも、「立派な聖者・善き人、英知ある人に親

しめよ」と言っています。わたしが言っているのと同じ趣旨です。

出だしの「よく気をつけていて」とありますのは、私で言いますと「こころのまなこを磨いて」ということになります。

触れ合うべき「立派な聖者・善き人、英知ある人」を形容するのが「明らかな智慧あり、学ぶところ多く、忍耐よく、戒めをまもる」ということです。

一般的に言つて、人が善い人になるのに最も大切なことは、戒律を守ること（持戒）、ヨーガ・坐禅・瞑想などをすること、智慧を得ること、の三つです。

は「戒めをまもる」に対応していますし、また「明らかな智慧あり」に対応しています。残りの聖者の状態である「忍耐強さ」は、のヨーガ・坐禅・瞑想をすることを可能にするための必須の条件となるものです。また、最後に「学ぶところ多く」ということですが、その聖者から学ぶところが多いかどうかは、その人を見る側の問題で、ある人が聖者であり、学ぶところがあると分かるには、見る側の人のこころがそうした完成された人格に向つて開かれていなければなりません。そのためには、自己への執着を捨てることが大切です。たとえば捨てられなくても、捨てようと努力・精進していなければ

ばならないと言えます。

第十六章 愛するもの

(二〇九) 道に違(たご)うたことになじみ、道に順(したが)ったことにいそしまず、目的を捨てて快いことだけを取る人は、みずからの道に沿って進む者を羨むに至るであろう。

「道に違い」「道に順い」「道に沿って進む」という場合の道とは何なのでしょうか。老子では解脱の境地を道と呼んでいます。ここでは、人の道、仏の道という場合の道に近いものと考えておきます。それは、仏教では「法」・「真理」・「教え」と呼んでもよいものだと言えます。因みに、この法ということばは、法句經の法であり、それは、ここで訳を採用させて頂いています。村元先生では『真理のことば』の真理に当たっています。そうした法に順ずるといふ、人生の目的を捨てて、快いことだけを取るといふ事は、まさに私の言う「自己」の情動の中の「欲望」に執らわれることを意味していません。

ところで、人生の目的ですが、私はそれを自己と他己の二つについて設定しています。自己は、自分を活かして生きていきたいという精神の働きですが、その目的として「人間は、自分自身を知ることを目指して、より善く生きようとする存在である。」としました。また、他己は他者を求め、他者とここを通わせたいとする精神の働きですが、その目的として「人間は法を目指して、より善く社会的であろうとする存在である。」としています。

人間はこの二つの目的の弁証法的統合によって、真に幸せで、生き甲斐のある生を全うすることができます。そのためには、意識の機能水準を超えて、無意識の煩惱蔵識と如来蔵識とが統合できなければなりません。それを可能にするものは、無意識のことですから、ひたすらな自己を捨てた修行がいります。それによってのみ自他の統合が可能となるのです。

この偈との関連で言いますと、他己の目的である法を目指す生き方を捨てることを意味します。そうなりますと、現代人の多くのように、わがままで、自己に執らわれた生き方になってしまうのです。それが、この偈で言っていますように「快いことだけを取る」ということに当たります。

このことは、私たちの実生活でも、他己の萎縮が起きている精神分裂病に罹った人や分裂病的な性格をもつた人では、法を守ることができにくく、社会性を失いやすくなつて、自己の情動への執着が起きます。具体的には、自己の欲望、つまり食欲（金銭欲・物欲）、優越欲（名誉欲・権力欲・勝利欲）、性欲、などへの執着が起こるのです。

ということとは、偈の最後に出てきます「みずからの道に沿つて進む者を羨む」ことを必然的に生み出します。自分は、他己が萎縮していますから、他者に対して善をなすことができないのですが、他者からは常に善をなしてもらわないと不安でならないのです。その不安が羨みを生み出します。自分よりも、お金を沢山もっていたり、良い物をもっていたり、名誉や権力が高かったり、などしますと、その羨みは発動されるのです。

現代人のために書かれた偈のように思われます。

（二一〇）愛する人と会うな。愛しない人と会うな。愛する人に会わないのは苦しい。また愛しない人に会うのも苦しい。

かなり分かりにくい偈だと思います。普通なら、愛し

ない人と会うのは、苦しいから会いたくないと思つても不思議ではないのですが、愛する人と会うのは楽しいから、会うのはよいことだと思えるからです。

なぜこんなことを言うのでしょうか。

仏教には、四苦八苦ということばがあります。四苦は生・老・病・死で、八苦はそれに怨憎会苦（おんぞうえく）・愛別離苦（あいべつりく）・求不得苦（ぐふとつく）・五取蘊苦（ごしゅうんく）を加えたものです。

この偈の「愛しない人と会うな。愛しない人に会うのは苦しい。」は、四苦八苦の怨憎会苦に当たります。

実は、「愛する人に会うな。愛する人に会わないのは苦しい。」は、四苦八苦の愛別離苦に当たっているのです。本当は、愛する人と別れるのは苦しい、ということなのですが、ここでは、怨憎会苦に合わせて、こう書いているのです。それで、分かりにくくなっているのです。でも、私たちはこうした苦を、最終的には、全て乗り越えていかなければなりません。

つまり、生の苦しみ（自分の生まれが、自分の思う通りのものでない苦しみ）も、老いる苦しみも、病気になる苦しみも、死の（不安の）苦しみも、そして、愛別離苦も、怨憎会苦も、求不得苦（欲しい物が得られない苦しみ）も、五取蘊苦（人間的な存在を構成するあらゆる物

質的・精神的要素が全て苦であるとする）も、克服して
いかなければならないのです。

もし、克服できれば、自分の生を感謝で受け入れるこ
とができますし、老・病・死が気にならなくなってきましたま
す。また、誰に会うのも、別れるのも、それがたとえ親
であろうと子であろうと、苦しみではなくなってきました。
自分から求めて、会うだけが目的で誰かに会わなければ
ならないということがなくなってきました。また、欲しい
物にこだわらなくなつて、たとえそれが手に入らなくて
も苦しみではなくなつてくるのです。

でも、そうなるためには、修行がいります。毎日々々
の精進がいるのです。

(二一) それ故に愛する人をつくるな。愛する人
を失うのはわざわざである。愛する人も憎む人もい
ない人々には、わずらいの絆が存在しない。

この偈は、一つ前の偈を受けています。でも、「愛す
る人をつくるな。」とは、なんだかますます分からない
感じがするのではないのでしょうか。

でも、これが分かるには、愛するということばの定義
が問題になります。普通、私たちが愛するという場合は、

愛する人への執着を表す場合が大多数なのです。

私の理論でも、人は他己によって「他者」へ定位して
いないと安心することができません。ですから、誰かと
心を通わせ合つて（コミュニケーションして）いなければ
、安定することができないのです。誰かに受け入れら
れ、誰かに認められ、誰かに愛されていないと、人間は
不安になるのです。因（ちな）みに、今、多くの人が、
自己に閉じていますから、人には愛をあげないのに、自
分だけ愛を欲しがっています。でも、社会全体では、そ
れが得られなくて多くの人が不安になつていっているのです。

でも、その愛は、相手から愛を返してもらえる時だけ
満足できる愛なのです。いま書きましたように、現代人
は、自分は愛をあげないのに、他者から愛を欲しがつて
います。ですから、お互いが愛を奪い合つていると言え
ます。本当の愛は、自己への執着からではなく、相手か
ら愛が返つてこようがこまいが関係なく愛を与えるもの
なのです。この偈でいう愛は、普通の執着した、見返り
を期待した愛です。そういう愛は相手次第ですぐ憎しみ
や苦しみに変わる愛です。ですから、愛さないほうがよ
いのです。でも、人間は、誰からも愛されなくても、不
安にならず、幸せでおれることができます。それは仏や
神と一体となる時頂く、仏や神の愛によってなのです。

後記

- 一、今月号を作っている最中に、普段使っているワイプ口が故障して、別のものに変えました。活字がいつもと違っているのはそのためです。
- 二、先日、台風九号が鳴門市を通過しました。讃岐でも強風が吹き荒れ、私の作っている畑のサツマイモ、サトイモ、大豆、ナス、トマト、インゲンマメ、サトウキビなどで、葉がいたみ、被害を受けました。
- 三、近所のたばこ農家では、まだ収穫できていなかった分に、大きな被害が出たようです。
- 四、農業は自然の営みに依存しています。ですから、天候や自然現象によって大きな影響を受けてしまいます。
- 五、先日、古本屋で農業の本を入手しました。梁瀬義亮著『生命の医と生命の農を求めて』（柏樹社刊）です。これまで福岡正信氏の自然農法の本（例えば、『自然農法 わら一本の革命』（春秋社刊））を読んだり、テレビでの同氏の話や実際の生活を見聞きしていましたが、この本もそれに匹敵する程、面白いものでした。その人は、お医者さんで、「無農薬有機農法」運動の推進者です。自らも、奈良県五条市に財団法人慈光会を設立され、その農法を実践されているようです。
- 六、いまの農業は、金儲け農業になっていて、農薬と化

学肥料漬けになっているが、それがどんなにおそろしいことか、と説いておられます。福岡氏と違うところは、梁瀬氏が無耕作、無肥料までは主張されていない点です。七、私は、どちらも完全には実践したことがありませんので、両氏の差を判断できませんが、農薬や化学肥料に頼ることがよくないことはよく分かります。少なくとも自然のサイクルを壊さない農業が望ましいのではないかと思います。私の育った家は、肥料を売っていましたが、子どもの中から農家へ配達をさせられました。その時から言えば、今は、有機肥料がなくなり、それに代わる何倍もの化学肥料が使われているように思われます。

月刊 こころのとも 第八卷 八月号 (通巻 九十二号)	平成九年八月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と、口座番号 01610 8 38660	

